

- (12) 宮崎長蔵・綿貫喜郎『行徳物語』一九八七 青山書店 九四頁
- (13) 鈴木和明『葛飾誌略』の世界』二〇一五 文芸社 七〇頁
- (14) 「秋葉山新井寺」公式サイト www.shinsei.jp/index.html
- (15) 鈴木和明『郷土読本「行徳塩焼の郷を訪ねて」』二〇一四 文芸社 一〇三―一〇四頁
- (16) 拙稿「災害伝承」を語り継ぐこと―千葉県市川市での実践から」『昔話伝説研究』三三三 二〇一四では、辻切り、御経塚を（災害伝承）の観点から取り上げた
- (17) 注(12) 九四―九五頁
- (18) 注(15) に同じ 二四一―二四二頁
- (19) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【83】新井の御経塚とコレラ―疫病対策の足跡をたどって―』『みどりのふおーらむ』一七二 二〇二〇年六月号 市川緑の市民フォーラム
- (20) 注(7) 二〇頁
- (21) 注(4) 二二六―二二七頁。宮久保にも同様の貴女漂着伝説が伝わっている
- (22) 注(4) 二二二頁
- (23) 注(9) 一四〇―一四三頁
- (24) 伊藤伸之輔・石垣絵美「年中行事と人の一生」注(4) 六八―六九頁
- (25) 市川民話の会調査編集『市川の伝承民話』一九九二 市川市教育委員会 三七三頁
- (26) 注(25) 二七七頁

- (27) 注(25) 一〇〇―一〇一頁
- (28) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【61】市民ミュージカルの光2016―中山競馬場と赤レンガを結ぶ―』『みどりのふおーらむ』一四九 二〇一六年八月号 市川緑の市民フォーラム、『第8回いちかわ市民ミュージカル「夏の光2016」空に消えた馬へ」公演プログラム』二〇一六 いちかわ市民ミュージカル実行委員会
- (29) 拙稿「文芸からみる市川の自然」【84】疫病除けの妖獣・アマビエ―市川の町なかにも出現―』『みどりのふおーらむ』一七三 二〇二〇年八月号 市川緑の市民フォーラム
- (30) 拙稿「コロナ禍で中断した市川民話の会の活動」『伝え』六七 二〇二〇 日本口承文芸学会
- (31) 石井正己「新型コロナウイルス感染症の時代と民話」野村敬子・石井正己編著『みんなで育む学びのまち真室川 昔話を未来につなぐ』二〇二〇 瑞木書房、拙稿「へ親子杉」にみる〈むがし〉と〈伝説〉と―野村敬子編『真室川の昔話』の「狐むがし」から―同書
- (32) 最近の動向として、岩本道弥編著『方法としての〈語り〉―民俗学をこえて―』二〇二〇 ミネルヴァ書房参照
*インターネットのサイトは二〇二〇年十一月閲覧
(ねぎし・ひでゆき/市川民話の会)

【緊急特集】 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究

疫病をはやらせに来る「二つ目小僧」への対処法

入江 英弥

一 家に近づけないようにする

神奈川県綾瀬市寺尾において、地元の方から次のような話をお聞きしたことがある。

「師走八日はよ、一つ目小僧が帳面持ってきてね」「そんなんだ悪病をよ、はやらせによ、ありや悪病神だからよ、だから、悪病をな、こんだ赤病でもよ、いわば腸チフスカ、チフスでもよ、ああいうな、病気をよ、はやり病をな、はやらせようとしてんだからよ。」

「下駄や何かを、この外へな、脱けっぱなしに置いたりなんかするとよ、そうすると一つ目小僧が師走八日に各家庭を、うちを回って歩いてよ、それで判を持って、それでそれを下駄なら下駄へ判を押し、それで帳面へ付けてつちまうんだ、な。そうするとそのうちが病気にかかっちゃうわけだ、といういわれなんだ。」

「小僧が来て、入口へ来て見てよ、『あ、こりや、俺の目を、俺は一つつきりつかないけど、たと目があるやつが、いや、あっこにいんな』って思ってた、『ここにはよう付けらんねえ』って言ってた、寄らねえで行っちゃうつてんだよ。」

師走八日に一つ目小僧がやってくる。悪病神で、病気をはやらせようとする。この日に下駄など履き物を出しっぱなしにしてあると、各家を回ってきた一つ目小僧がそれに判を押し、持ってきた帳面に付ける。そうすると、病気にかかっちゃう。そこで、この日に一つ目小僧が来ないようにするために、「目のたんとある籠」を竿の先につけて立てておく。この籠を見た一つ目小僧は、目がたくさんあるので寄ることができず、帳面に付けることを諦めて行ってしまう、というのである。

事八日に厄神とか、疫病神などが去来すると伝えるところは、東北地方から関東地方に広がっていて、そうした負の存在を一つ目小僧とするところはおもに関東地方に分布する。この一つ目小僧は去来する性格を持つことから「訪れもの」の一つに位

置づけられる。また、目が一つという属性から不完全性や恐怖性を持つ存在、病気をはやらせるという性質から人間に敵対する負そのものの存在とみられる。

この事例からわかるように、一つ目小僧は目がたくさんあると怖いらしく、そのため「目籠」などと呼ばれる目のたくさんある籠を屋外に出しておいた。神奈川県足柄上郡山北町山市場などでも、目が一つの「目一つ小僧」が目籠を見て、目の多さに恐れるという⁽²⁾。これらの伝承から、目に特徴のある霊的存在に對して、目で對抗しようとしたと考えられる。目の威力への信頼感に基づく行為といえる。

このように事八日に去来する負の存在に對して、こちらから積極的に「攻める」のではなく、家々において目籠を出すことで近寄せないようにした。これは、「防ぐ」方法の一つに位置づけられる。神仏の札を玄関に貼ってその威力から負の存在の侵入を阻んだり、「厄神の宿⁽³⁾」のように厄神を家に迎え入れ、接待して送ったりするのは、異なる方法である。また、目籠といった日常生活用具を呪的な道具として利用したことは興味深い。

このほか、山北町などでは、目籠だけでは安心できなかったらしく、グミの木を囲炉裏で燃やして臭い匂いを出したり、玄関の軒先にメザシの頭と尾を焼いて串にさしたものをさし立てたりして、家の中に入ってこれられないようにしたという。このように人々はさまざま防除法を編み出して、病気をはやらせる

らないという。正月十四日の地区単位で行われる火祭りは、それで行われるというのである。

これは、「一つ目小僧と道祖神」と呼ばれ、正月十四日に行われる火祭りの由来を説く話である。福島県を北限にして、新潟県や長野県、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県などに分布する。それは、おおよそ、小正月の火祭り⁽⁴⁾と道祖神の祭りとが結びついた地域に重なっている。

内容からすると、道祖神は火祭りを行ったにもかかわらず、「火事が起きた」とうまい言い訳をして負の存在を帰らせようとす。人間をおびやかす存在に對して、上手にお引き取り願うことに成功する。推察するに、一つ目小僧といった負の存在がもたらそうとする災厄の処理が人々の課題となっていて、この伝承がそれを解決する方法を示すことから、事八日に負の存在が去来するという伝承を持ち、かつ、小正月の火祭りと道祖神の祭りとが結びついた地域に受け入れられていったのではなからうか。

この話は、十二月八日に一つ目小僧という目に特徴のある存在に對して、目籠を外に出してその目で對抗する。それでも一つ目小僧は探索を続けて、人々へ病気をはやらせるために記した帳面を道祖神のもとに置いていってしまう。そこで、小正月に火祭りを催してそれを滅却しようとする。そして、二月八日に道祖神が「正月十四日に火事に遭った」などとうまく対応すること、帳面を受け取りに来た一つ目小僧を諦めさせる。そ

存在に対処しようとしたことがわかる。

二 上手に應對してお引き取り願う

先の話に続けて、綾瀬市寺尾の方は次のように語っていた。一つ目小僧は各家を巡って歩いて、籠など何も無い所に寄って、下駄が外にあれば、それへ判を押しして帳面に付ける。すべて回りきったところで、道祖神に今度二月八日に来るからこの帳面と判を預かってほしいと頼む。そして、二月八日に一つ目小僧が道祖神のもとに再びやって来る。

「いや、それをな、俺はな、正月の十四日の日によ、大火事にあっちゃってよ、おめえから預かったな、判こや帳面をな、きれいに燃しちゃった。申し訳なかつたけど燃しちゃった、ねえ」って言ってな。『なんだそうか。それじゃ仕方がねえ。しょうがねえ』ってそう言ってな、一つ目小僧はむなしく帰っちゃった。そこでその地区はね、無病息災でみんな暮らすことができたんだ。これの話だよ、ドンドン火はそれなんだ。」

一つ目小僧は、十二月八日に家々を探索して外に出してある下駄を見つけるとそれに判を押し、帳面に記録する。地区を回りきると、帳面と判を道祖神に預けていく。二月八日に再び訪れると、道祖神が「正月十四日に火事に遭って、預かった帳面と判を燃してしまった」と詫げる。一つ目小僧は「火事なら仕方がない」と言って諦めて帰る。それで、地区には病気がはや

のため人々は無病息災でいられるという流れである。

防衛してもうまく追い払える保証はない。何段階かに分けて対処することで、病気をはやらせに来る負の存在を防ぐことができると考えられたことが、この話の基底にあるように思われる。

注

- (1) 綾瀬市秘書課市史編集係編『綾瀬市史民俗調査報告書』五一九九六 綾瀬市 二四九・二五〇頁
- (2) 山北町編・発行『山北町史』別編 民俗 二〇〇一 二九〇頁
- (3) 注(1)に同じ。

参考文献

- 佐々木勝『厄除け—日本人の靈魂観—一九八八 名著出版
入江英弥『行事由来伝説「一つ目小僧と道祖神」の形成—目籠・事八日・齋日—』『民具マンスリー』三四卷一〇号 二〇〇二
入江英弥「小正月の火祭り由来伝承考—静岡県にみられる「一つ目小僧と道祖神」の意味と分布域の形成—」静岡県民俗学会編『中日本民俗論』二〇〇六 岩田書院
入江英弥「行事由来説明伝説「一つ目小僧と道祖神」における道祖神の役割—事八日の訪れものと道祖神のやり取りに注目して—」『道祖神研究』一号 二〇〇七

(いりえ・ひでや／弘前学院大学文学部)